

一見、普通に見える親子関係。だが、実際には長期に子供の要求に見合う支援がなされないまま子供のストレスが蓄積し問題行動を引き起こすケースが多い。横浜心理相談センター(横浜市神奈川区六角橋)所長で心理カウンセラーの千田恵吾さんは、長崎県佐世保市の小学校で起きた六年生の同級生殺害事件の家裁審判などを例示しながら、子供の真像に焦点が合わぬ子育ての危うさを指摘。「まずわが子から親はどう見られているのか、親自身が知ることが必要だ」と訴えている。

(古賀 敬之)

危うさ増す子育て

■放任が多い

千田さんは親子関係などを中心に年間に新たに百五十〜二百ケースの心理相談をしている。多いのは小学校中学年から中学生の子供を持つ家庭。相談に先立ち子供に親子関係調査(心理テスト)をする。友人、学習、生活などの各領域について、親の受容性や指導性などを把握するための。

佐世保の事件で家裁の最終審判は、「加害女兒幼少期より自分の欲求や感情を受け止めてくれる他者がいる」という基本的な感情が希薄」と、親の受容性に問題があったことを指摘した。千田さんは「受容性に問題があっただけでなく、指導性にもかなり問題があったケースだ」と見る。

調査結果では、近年の

子供の親に対する見方は、これに逆転、受容性は大きく変化してきたとい

「望ましい」「普通」と見る一方、指導性については「問題あり」とするケースが多かった。数年前

親の「指導力」が不足

今日さあ
友人の所に泊まるからあ



指導すべきか情報を得ているが、子供の前で実際に指導の言葉が出てこない。例えば、幼少期から脱いだ衣服は「片付けなさい」と言っていない。だから、子供は脱ぎっぱなしでも平気。中学生の子供がケイタイで友人宅に泊まると自宅に連絡してくると、母親は「やめさせたいけど、言うときれるから言わない」という具合だという。

「それはお母さん、声を出してあいさつすること、あなたには普通でいい」と自殺計画を立てる思春期の子供もいる。問題行動も、親の思い込みが親をどう思っているか、親に把握してもらう必要がある

■幼稚化顕著

受容性と指導性の逆転現象について、千田さんは「かつては親のしつけ

子供の要求とズレ 問題行動の引き金

横浜心理相談センター 千田所長が指摘

リングを通した臨牀的な実感」とも言う。親が幼稚化する事例の一端は、こうだ。カウンセリングで、ある母親とその娘が同時に娘の友人の悪口を言い出した。友人が娘を無視したことが悪口の内容。母親は友人の母親に対して「私があいさつをしているのに、向こうはあいさつをしない」とののしった。

千田さんが最も憂えるのは、親がずっと気付かないまま子供の要求に見合わない「指導」や「受容」を続けている場合が多いことだ。カウンセリングを受ける家族は、大半が子供の要求とズレているケースだとい

「父終審判は「加害女兒の両親はおとなしく手のかからない子として問題性を見過ごしていた」とした。友人は非行グループに属していたが、イジメをするような子ではなかった。無視は一回だけ。その後普通に対応していた。母親にも話をよく聞くと、友人の母親はあいさつしなくて黙って通り過ぎていた。母親は「親が大人になって見えていた子供が成人になって、親が「幼少期からい子で育てやすかった」と、親が「幼少期からい子で育てやすかった」と、親の内面をのぞく。夫婦げんかも時折ならいいが、いつもなら問題が起きるとい

■気付かずに

千田さんが最も憂えるのは、親がずっと気付かないまま子供の要求に見合わない「指導」や「受容」を続けている場合が多いことだ。カウンセリングを受ける家族は、大半が子供の要求とズレているケースだとい

ある子供の父親は大手企業のサラリーマン、母親は専業主婦。子供は幼少期から荒れるようなこともなく、成績もよく、親から見れば「育てやすいいい子」だった。だが、父親は自らに非があっても子供に謝ることはなかったという。大学への進路問題で父親との意見対立が発端で、子供はこれまで蓄積したストレスが、一気に押し寄せリストラなど自虐行為を繰り返すようになった。「父親が謝罪してカウンセリ